

思春期女子グループの友人関係と携帯メール使用 —グループの友人への欲求および対面の友人関係との関連から—

隅田真理子・島谷まき子

Friendships in Informal Groups and Exchanging Email with Mobile Phones by Adolescent Females

Mariko SUMITA and Makiko SHIMATNI

Email exchanges with friends in informal groups using mobile phones and the influence of mobile phone email use on developing face-to-face friendships among adolescent females was investigated in a metropolitan area of Japan. Participants were female junior high school students ($n=323$). Results indicated the following. (1) Most students (84.2%) had a mobile phone and exchanged email with friends in their group. (2) When they sent email to friends, they experienced anxiety or happiness according to the content of the email and face-to-face relationship with group members. (3) One-to-one relationships through email and face-to-face relationships in the group were linked. Behavior to confirm intimacy was the most comprehensible explanations of their behavior.

Key words : adolescence female (思春期女子), friendship relations of informal group (グループの友人関係), mobile mail (携帯メール)

問題と目的

思春期は、それまでの親との依存的関係から離れ、不安を抱えながら仲間との関係を強く求める時期である。第二次的性徴に伴う身体変化や自立への葛藤、校則や社会的ルールに対する戸惑い、さらには自意識の過敏性への気づきなど、多くの変化を思春期に体験する(菅, 1988)。しかし、こういう変化を一人で乗り越えることは困難でも、同じような変化を体験している同性の友人と共有することで、自分だけではないということを認識し、安心感を生むことができる(荻野, 1997)。そのため、学童期の友人関係に比べ、思春期は同質性を重視したつきあい方が増える。つまり、仲間はずれにならないように心がけながら、とにかく仲間と一緒に行動するような、友人に対する強い同調が如実に示される(福富, 1997)。特に、思春期女子は凝集性の高い同性友人グループを多

く作り(三好, 1999)、そのグループ内で自分だけが浮いた存在となり仲間はずれにならないよう、男子よりも周りの友人へ同調的なつきあい方を顕著にすることが指摘されている(落合・佐藤, 1996; 榎本, 2003)。彼女たちは大抵いつも決まったメンバーと一緒に教室移動をし、連れ添ってトイレに行き(「お手洗いフレンド」天野, 1975)、机を寄せ合ってお昼を食べている。気の合う者たちと多くの時間を共有し、仲間意識を育み、時にはお互いの悩みを打ち明け共感しあう、などといったグループ内の密度の濃い関わりが、彼女たちにとって重要度の高い精神的よりどころとなっていることがうかがえる。一方、グループ内における力動の変化はありながらも、各グループは固定的で閉鎖的かつ排他的な側面を持っている。グループは相互に独立しており、グループ間の対立や、さらには個人を標的にしたいじめが生じてくることも決して珍しいことではない(三好, 1999)。

誰がどのグループに入っているかということは、大抵の者によって把握されており、あるグループに居づらくなった場合、別のグループに移ることは困難であり、かといってどのグループにも属さず一人で行動することは、非常に惨めなこととして捉えられている（中村，1998）。保坂（1993）が、「女子生徒たちは自分の属しているグループからはみ出さないように並々ならぬ努力をしている」と述べているように、思春期女子にとって、友人グループは学校生活における最低限の居場所を確保するための必須の場となっている。

他方、近年わが国において、携帯電話は日常的なコミュニケーションツールとして、生活に定着している。平成19年11月末時点における携帯電話の普及率は85%を超えている（電気通信事業者協会，2007）。特に10代への普及が著しく、大学生の携帯電話・PHS所持率は98%、高校生においては97%と、ほぼ全員が所持している状況にある。さらには、小学生の24.1%、中学生の66.7%が携帯電話を所持している（モバイル社会研究所，2005）。

中学生は通話機能よりもメール機能をより多く利用している（モバイル社会研究所，2005；緒方・和泉・北池，2006）。メールの相手は、順に「学校の友人」「学校外の友人」「親」「先輩および後輩」と続き、友人が最も多い。1日の受信数は0～10件が43%、11～20件が19%、21～50件が19%、51件以上が19%である（モバイル社会研究所，2006）。また、内閣府の「情報化社会と青少年に関する意識調査」（内閣府，2007）では、中学生女子の受信数は1～5件が7.5%、6～10件が12.7%、11～20件が29.1%、21～50件が23.9%、51件以上が12.7%であり、非常に多い。メールの内容（複数回答可）は、「放課後の予定・遊びのこと（72%）」がもっとも多く、次いで「授業や部活に関すること（57%）」「友人の情報（評価・うわさ）（56%）」「あそび・癒しのメッセージ（55%）」となっている（モバイル社会研究所，2005）。中学生にとって、メールは単に連絡手段としてだけでなく、おしゃべり感覚の遊びのツールとして利用されている実態がうかがえる。

携帯電話は、空間や時間を越えたコミュニケーションツールとして、個人と個人を直接的に結ぶ、親和性の高いプライベートなものであり、即時性・利便性に優れた特性をもっている（林・宮田・林，2004）。一般的に携帯電話や携帯メール

は人間関係を広くできたり深くできると考えられており、有用なコミュニケーションの手段として意識されている（足立・高田・雄山・松本，2003；緒方ら，2006）。一方、上別府・杉浦（2002）は、中学生の友人との携帯メール交信が、コミュニケーション上のトラブルとなる可能性をあげている。つまり、メール内容が誤解された経験を多くの中学生在が有していることを明らかにしている。また、メール返信のない心配感やメール送信後の後悔体験などの報告から、友人との携帯メール使用が情緒不安の一因になっている可能性も指摘している。

以上のような先行研究をふまえ、本研究では以下の問題を挙げる。思春期女子の友人関係の特色として同性の友達グループに所属することが重要な意味を持つことと、友人との携帯メールのやりとりが友人関係に影響を及ぼすことが指摘されている。しかし、所属する同性グループの友人と、実際にどのくらいの頻度で、どのような内容のメールをやりとりしているのかは明らかにされていない。また、友人に対してどのような欲求をもってメールを使用しているのかも十分に明らかにされていない。さらに、思春期女子の携帯メールの頻繁なやりとりと対面の友人関係には、どのような関連があるのかを明らかにした研究はほとんどない。これらを検討することで、思春期女子の対面のグループ内の友人関係という、観察可能な行動レベルの関係性だけでなく、当事者にしかやりとりする内容がわからない携帯メール使用という、観察不可能な関係性をも理解し、思春期女子グループを包括的に理解することにつながると考える。

そこで、本研究では、以下の4点を目的とする。
①首都圏都市部における思春期女子グループの友人との携帯メール使用の実態を把握する。
②思春期女子がもつグループの友人への欲求と携帯メール使用の相互の影響を検討する。
③携帯メール使用と対面のグループ内の友人関係の相互の影響を検討する。
④グループの友人への欲求と対面のグループ内の友人関係の相互の影響を検討する。

方 法

1. 調査時期と調査手続き

2007年7月に、首都圏都市部の中学校計2校にそれぞれ質問紙調査を実施した。調査は授業終了

後のホームルーム時に教師が一斉に配布し、その場で対象者が回答し、一斉に教師が回収した。

2. 調査対象者

調査協力校に通学する中学1年生～中学3年生の女子計330名に質問紙を配布し、323名から回収した（回収率97.9%）。

3. 質問紙の構成

質問紙の構成は以下の(1)～(4)である。

(1) グループ^oの友人との携帯メール使用に関する質問項目

①携帯電話・PHSの所持に関する質問、②所属グループに関する質問、③最も大切にしているグループの友人との携帯メール使用に関する質問項目からなる。

(2) 携帯メール送信時の感情状態尺度

予備調査の結果をもとに、グループの友人への携帯メール送信時の感情状態を測定する全10項目の質問紙を作成した。『あなたは、自分が入っている友達グループの女の子にメールを送るとき、もしくは送った直後に、どのようなことを感じますか』という教示文のもと、「そう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4件法で回答を求めた。「そう思う」ほど得点が高くなるよう、各1～4点を与えた。

(3) グループの友人への欲求尺度

グループの友人への欲求を測定するために、榎本（2000）の「友人関係の欲求的側面」尺度と、泊（2004）の「友人関係の欲求的側面」尺度の項目をもとに、中学生女子が実施できるよう修正し、全33項目の質問紙を作成した。『あなたは、自分が入っている友達グループの女の子に、普段どのようなことを望んでいますか』という教示文のもと、「そう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4件法で回答を求めた。「そう思う」ほど得点が高くなるよう、各1～4点を与えた。

(4) グループの友人との対面の友人関係尺度

グループの友人との対面の友人関係を測定するために、三好（1998）の「グループ関わり」尺度、岡田（1993）の「友人関係様式」尺度、榎本

（2000）の「友人関係の活動的側面」尺度の項目をもとに、中学生女子が実施できるよう修正し、全20項目の質問紙を作成した。『あなたは、自分が入っている友達グループの女の子達と実際に会っているとき、普段どのようにかかわっていますか』という教示文のもと、「あてはまる」「ややあてはまる」「ややあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で回答を求めた。「あてはまる」ほど得点が高くなるよう、各1～4点を与えた。

結 果

1. 分析対象者の属性

分析対象者322名の内訳は、中学1年生が99名（30.7%）、中学2年生が115名（35.7%）、中学3年生が108名（33.5%）であった。

2. 思春期女子のグループの友人との携帯メール使用の実態

分析対象者のうち、携帯電話・PHSの所持者は271名であり（84.2%）、非所持者は51名（15.8%）であった。非所持の理由は、「保護者がもつことを許してくれないから」が最も多く（82.3%）、「必要だと思わないから」は11.7%であった。現在は所持していないが今後携帯電話を所持したいと思うかに対しては、「はい」が92.2%を占めた。所持することを望む理由（複数回答可）は、「友達とメールをしたいから」が52.9%、「すぐに連絡ができて便利だから」が51.0%、「ほとんどの友達も持っているから」が27.5%であった。

女子グループに入っているかたずねたところ、「はい」が98.1%、「いいえ」は1.9%にすぎなかった。複数のグループに所属している場合も含め、最も大切にしているグループは「クラス」が最も多く（77.5%）、次いで「部活動」が続く（10.8%）、「習い事」は0.9%にすぎなかった。「その他」（10.8%）としては、「前のクラスの友達」や、「他のクラスの友達」が多く、また、「1つは選べない。どれも大切」という記述もみられた。最も大切にしているグループの人数（自分自身を含めた人数）は、「3人～5人」が55.1%で最も多く、次いで「6人～9人」が24.4%、「10人以上」が8.5%、「2人」が5.4%であった。最も大切にしているグループの友人のうち、携帯メー

Table 1 携帯メール送信時の感情状態尺度の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

質問項目	F1	F2
第1因子:「気がかり」($\alpha = .74$)		
メール送信後、友達からちゃんと返信がくるか不安になる	0.79	-0.05
メール送信後、友達が見てくれたか気になる	0.68	0.01
友達が自分のメールを読んで、どんな気持ちになったかな、と思う	0.58	-0.11
友達とのメールのやりとりを、どこで終わりにしていいかが難しい	0.51	-0.19
友達からメールがきたので、返信しなければならない	0.46	0.05
友達から早くメールの返信がほしい	0.46	0.21
第2因子:「楽しさ」($\alpha = .59$)		
友達とメールのやりとりをすることは楽しい	0.00	0.76
友達とはメールをしたいと思っていない	0.27	- 0.61
友達からメールの返信があるとうれしい	0.25	0.40
因子間相関	F1	F2
F1	-	.41
F2		-

ルのやりとりをする友人の人数は、「3人～5人」が48.7%で最も多く、次いで、「1人～2人」が25.1%、「6人～9人」が12.0%、「10人以上」が5.6%、「0人」が3.6%であった。

最も大切にしているグループメンバーとの携帯メールの1日の送信件数は、「0～20件」が90.1%と圧倒的に多く、次いで「21～50件」が6.1%、「51～80件」が2.7%、「81件以上」が1.1%であった。また、受信数についても同様の傾向がみられた。グループの友人とのメールの内容（複数回答可）は、「なんとなくのおしゃべり」が最も多く74.9%で、次いで「時間や待ち合わせなどの事務的な連絡」が73.8%、「授業・行事・部活動など学校のことにに関する情報交換」が73.0%であった。「自分や友達の悩み事相談」は26.2%、「同じグループの女の子の友達についての話」は7.9%、「男の子の友達についての話」は6.0%、「同じグループではない女の子の友達についての話」は5.6%であった。

3. 携帯メール送信時の感情状態尺度の因子分析結果

携帯メール送信時の感情状態尺度の全10項目について、主因子法・Promax 回転の因子分析を行い、最終的には2因子9項目が抽出された。因子パターンと因子間相関を Table 1 に示す。第1因子

は6項目で構成され、「メール送信後、友達からちゃんと返信がくるか不安になる」など、友人がメールを見てくれたか、返信がくるか気がかりである、という内容の項目に高い負荷量を示しているため、「気がかり」因子と命名した。第2因子は3項目で構成され、「友達とメールのやりとりをすることは楽しい」など、友人とのメールのやりとりの楽しさについて言及する内容の項目に高い負荷量を示しているため、「楽しさ」因子と命名した。

下位尺度に含まれる項目数が異なるため、項目平均値を下位尺度得点とした。その結果、「気がかり」因子得点は2.77 ($SD = .61$)、「楽しさ」因子得点は3.75 ($SD = .39$)となった。4件法の尺度軸から考えると、「気がかり」因子得点は「3. 少しそう思う」に近い値を、「楽しさ」因子得点は「4. そう思う」に近い値を示した。

4. グループの友人への欲求尺度の因子分析結果

グループの友人への欲求尺度の全33項目について、主因子法・Promax 回転による因子分析を行い、最終的に5因子22項目を抽出した。因子パターンと因子間相関を Table 2 に示す。第1因子は4項目で構成され、「友達と同じ行動をしたい」など、友人と同じ行動を望む内容の項目に高い負荷量を示しているため、「同調欲求」因子と命名

した。第2因子は5項目で構成され、「友達と一緒にいたい」、「友達と遊びたい」など、友人と多くの時間を一緒にし、楽しい雰囲気になることを望む内容の項目に高い負荷量を示しているため、「親和欲求」因子と命名した。第3因子は6項目で構成され、「友達には何でも話してほしい」、「友達に自分のことを相談したい」など、友人とどんなことでも話す関係を望む内容の項目に高い負荷量を示しているため、「開示欲求」因子と命名した。

した。第4因子は4項目で構成され、「お互いに傷つけないよう気をつかいたい」など、友達とはやさしくし合うことを望む内容の項目に高い負荷量を示しているため、「やさしさ」因子と命名した。第5因子は3項目で構成され、「お互いに友達には甘えすぎないようにしたい」など、友達とは適切な距離間を保つことを望む内容の項目に高い因子負荷量を示しているため、「心理的距離」因子と命名した。

Table 2 グループの友人への欲求尺度の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

質問文	F1	F2	F3	F4	F5
第1因子:「同調欲求」($\alpha = .75$)					
友達と同じ行動をしたい	0.81	0.17	-0.14	-0.08	0.15
友達には私と同じ行動をしてほしい	0.77	-0.01	0.08	-0.12	0.05
友達と趣味や好みが一致したい	0.49	-0.07	0.15	0.00	0.10
友達といすることで安心感を得たい	0.36	0.13	0.24	0.09	0.07
第2因子:「親和欲求」($\alpha = .84$)					
友達と一緒にいたい	0.12	0.90	-0.01	-0.23	-0.06
友達と一緒にの時間を多く過ごしたい	-0.05	0.77	0.07	0.00	0.01
友達と遊びたい	-0.07	0.66	-0.15	0.13	-0.07
友達と楽しい時間を共有したい	-0.16	0.59	0.13	0.23	0.04
友達には私と遊んでほしい	0.28	0.41	-0.06	0.10	0.10
第3因子:「開示欲求」($\alpha = .81$)					
友達には何でも話したい	0.11	-0.07	0.81	-0.04	-0.24
友達には何でも話してほしい	0.03	0.06	0.77	-0.13	0.00
友達に自分のことを相談したい	0.19	0.04	0.52	0.00	-0.14
友達に頼りにされたい	0.10	-0.03	0.46	0.25	0.02
友達には私の意見をきちんと言いたい	0.09	0.04	0.40	-0.08	0.29
友達の相談にのりたい	-0.01	0.28	0.39	0.08	0.10
第4因子:「やさしさ」($\alpha = .65$)					
友達にはやさしくしてもらいたい	0.09	-0.03	0.00	0.69	-0.09
お互いに傷つけないよう気をつかいたい	0.01	0.07	-0.16	0.48	0.19
友達にはやさしくしたい	-0.25	0.20	0.16	0.47	0.04
友達にはおもしろいことをしたい	0.15	0.07	-0.03	0.41	0.09
第5因子:「心理的距離」($\alpha = .59$)					
お互いに友達には甘えすぎないようにしたい	0.12	0.06	-0.07	0.00	0.61
お互いのプライバシーには入らないようにしたい	0.19	-0.21	-0.15	0.21	0.50
友達とはお互いに個性を尊重しあいたい	-0.08	0.17	0.22	-0.01	0.40
因子間相関	F1	F2	F3	F4	F5
F1	-	.53	.42	.52	.24
F2		-	.71	.66	.07
F3			-	.64	.19
F4				-	.07
F5					-

項目平均値を下位尺度得点とした結果、「同調欲求」因子得点は2.51 ($SD=.67$)、「親和欲求」因子得点は3.47 ($SD=.54$)、「開示欲求」因子得点は3.12 ($SD=.62$)、「やさしさ」因子得点は3.35 ($SD=.51$)、「心理的距離」因子得点は3.12 ($SD=.57$)となった。4件法の尺度軸から考えると、全体的に「3. 少しそう思う」に近い値を示した。

5. グループの友人との対面の友人関係尺度の因子分析結果

グループの友人との対面の友人関係尺度の全20

項目について、主因子法・Promax 回転による因子分析を行い、最終的に4因子16項目を抽出した。因子パターンと因子間相関を Table 3 に示す。第1因子は4項目で構成され、「人間関係がこじれるような悪口は言わない」など、友人に対する配慮を心がけている内容の項目に高い負荷量を示しているため、「他者配慮」因子と命名した。第2因子は5項目で構成され、「内心どう思っているが、とりあえずうまく周りに調子を合わせておくことがある」など、自分をあまり出さずに周りに合わせている内容の項目に高い負荷量を示しているため、「自己抑制的同調」因子と命名した。

Table 3 グループ友人との対面の友人関係尺度の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

質問項目	F1	F2	F3	F4
第1因子:「他者配慮」($\alpha=.67$)				
人間関係がこじれるような悪口は言わない	0.82	-0.14	0.02	-0.23
めんどろを起すようなかげ口は言わない	0.70	0.01	0.07	-0.18
周りの人の気持ちを思いやり、相手の身になって接している	0.53	-0.18	0.08	0.27
周りの誰かがつらい思いをすることがないように、話題などに気を配っている	0.40	0.12	-0.06	0.16
第2因子:「自己抑制的同調」($\alpha=.62$)				
内心どう思っているが、とりあえずうまく周りに調子を合わせておくことがある	-0.09	0.62	0.03	0.14
自分の考えを素直に言っている	0.08	-0.50	0.14	0.27
グループでうまくやっていくために、たまに心にもないことを言っている	-0.08	0.48	0.18	0.09
*あまり自分をさらけ出さない(*逆転項目)	-0.05	-0.48	-0.11	0.20
突然自分がまじめな話をして、友達をしらけさせないようにしている	0.13	0.39	0.17	0.12
第3因子:「個別行動」($\alpha=.63$)				
あまり一緒にいすぎないで、少し距離をとっている	0.05	0.06	0.73	-0.04
お互いあまりくつきすぎない	0.10	0.00	0.64	0.09
友達と一緒にいるときでも別々のことをしていることが多い	-0.07	0.12	0.42	-0.06
第4因子:「親密確認行動」($\alpha=.59$)				
冗談を言ってグループのみんなを笑わせている	-0.08	-0.09	0.15	0.77
トイレに一緒に行っている	-0.14	0.03	-0.02	0.46
みんなと一緒にいることが多い	0.12	0.02	-0.28	0.37
教室移動など、場所を移動するときは一緒に行っている	0.04	-0.01	-0.25	0.37
因子間相関	F1	F2	F3	F4
F1	-	.36	.03	.37
F2		-	.25	.24
F3			-	-.17
F4				-

第3因子は3項目で構成され、「あまり一緒にいすぎないで、少し距離をとっている」など、友人とはべったりせず、適度な距離をとっている内容の項目に高い負荷量を示しているため、「個別行動」因子と命名した。第4因子は4項目で構成され、「冗談を言ってグループのみんなを笑わせている」、「トイレに一緒に行っている」など、友人と行動を共にすることにより、お互いが親密であることを確認する内容の項目に高い負荷量を示しているため、「親密確認行動」因子と命名した。

項目平均値を下位尺度得点とした結果、「他者配慮」因子得点は3.08 ($SD=.59$)、「自己抑制的同調」因子得点は2.33 ($SD=.62$)、「個別行動」因子得点は2.26 ($SD=.67$)、「親密確認行動」因子得点は3.16 ($SD=.58$)となった。4件法の尺度軸から考えると、「自己抑制的同調」因子得点と「個別行動」因子得点が「2. ややあてはまらない」に、「他者配慮」因子得点と「親密確認行動」因子得点が「3. ややあてはまる」に近い値を示した。

6. 携帯メール送信時の感情状態とグループの友人への欲求および対面の友人関係の関連

各尺度の下位尺度得点間について、それぞれピアソンの積率相関係数を算出した。結果を Table 4、5、6 に示す。携帯メール送信時の感情状態尺度とグループの友人への欲求尺度の間には、「楽しさ」と「心理的距離」間を除き、正の弱い相関 ($r=.20\sim.42$) がみられた (Table 4)。また、携帯メール送信時の感情状態尺度とグループの友人との対面の友人関係尺度の間には、「気がかり」と「個別行動」間、「楽しさ」と「他者配慮」間を除き、弱い正の相関 ($r=.16\sim.32$) がみられた。一方、「楽しさ」と「個別行動」間には、負の弱い相関 ($r=-.14$) がみられた (Table 5)。さらに、グループの友人への欲求尺度とグループの友人との対面の友人関係尺度の間には、全体的には弱い正の相関 ($r=.16\sim.41$) がみられたが、「個別行動」と「同調欲求」「親和欲求」「開示欲求」との間には弱い負の相関 ($r=-.11\sim-.26$) がみられた (Table 6)。

Table 4 携帯メール送信時の感情状態尺度とグループの友人への欲求尺度の相関

	同調欲求	親和欲求	開示欲求	やさしさ	心理的距離
気がかり	.42**	.27**	.34**	.22**	.24**
楽しさ	.20**	.31**	.33**	.20**	.09

** $p<.01$

Table 5 携帯メール送信時の感情状態尺度とグループの友人との対面の友人関係尺度の相関

	他者配慮	自己抑制的同調	個別行動	親密確認行動
気がかり	.30**	.32**	.11	.16*
楽しさ	.04	.20**	-.14*	.26**

** $p<.01$ * $p<.05$

Table 6 グループの友人への欲求尺度とグループの友人との対面の友人関係尺度の相関

	他者配慮	自己抑制的同調	個別行動	親密確認行動
同調欲求	.26**	.26**	-.16**	.28**
親和欲求	.33**	-.01	-.26**	.41**
開示欲求	.36**	-.03	-.11*	.37**
やさしさ	.41**	.16**	-.04	.36**
心理的距離	.25**	.27**	.27**	-.02

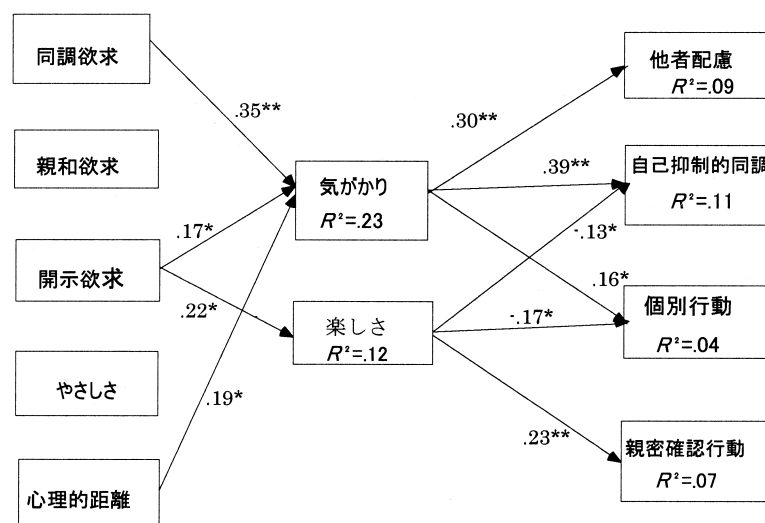
** $p<.01$ * $p<.05$

これらの結果をふまえ、本研究の目的②③④を検討するために、強制投入法による重回帰分析を実施した。結果を Figure 1 ～ Figure 4 に示す。

まず、グループの友人への欲求と携帯メール送信時の感情状態の相互の影響をみていく。グループの友人への欲求である「同調欲求」と「心理的距離」は、携帯メール送信時の「気がかり」に対して、正の影響（ $\beta = .35$ 、 $\beta = .19$ ）を与えてい

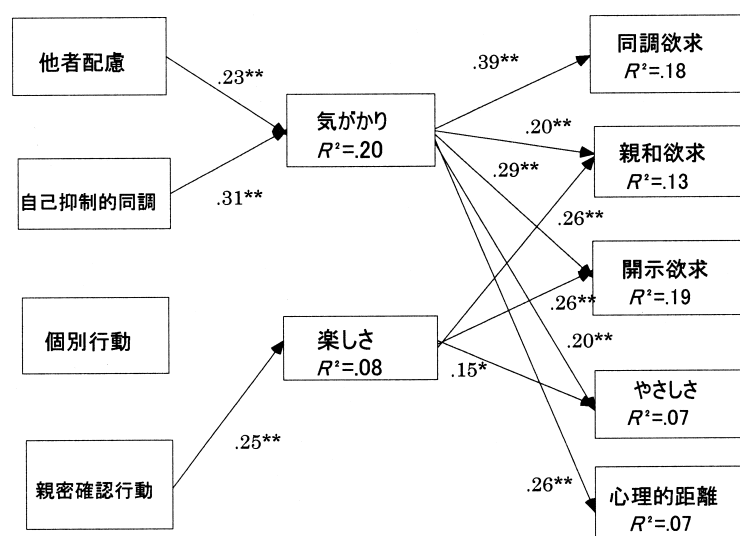
た。また、「開示欲求」はメール送信時の「気がかり」と「楽しさ」の両方に弱い正の影響（ $\beta = .17$ 、 $\beta = .22$ ）を与えていた（Figure 1）。一方、「気がかり」はすべてのグループの友人への欲求に弱い正の影響を与えていた（Figure 2）。

次に、携帯メール送信時の感情状態と対面のグループ内の友人関係の相互の影響をみていく。「気がかり」は「他者配慮」に対して弱い正の影



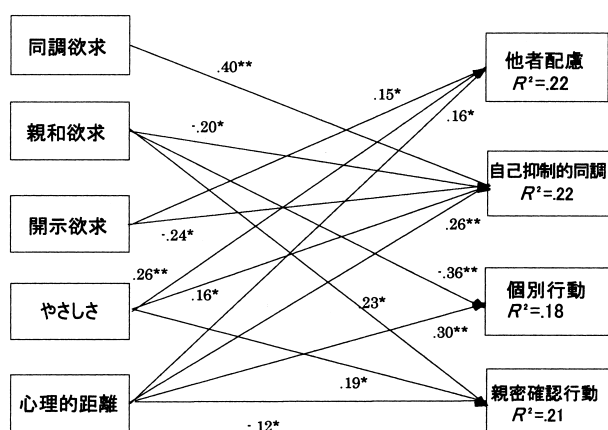
R^2 : 説明率 値は標準偏回帰係数 $^{**} p < .01$ $^* p < .05$

Figure 1. グループの友人への欲求が携帯メール送信時の感情状態へ与える影響および携帯メール送信時の感情状態がグループの友人との対面の友人関係へ与える影響を示すパス・ダイアグラム



R^2 : 説明率 値は標準偏回帰係数 $^{**} p < .01$ $^* p < .05$

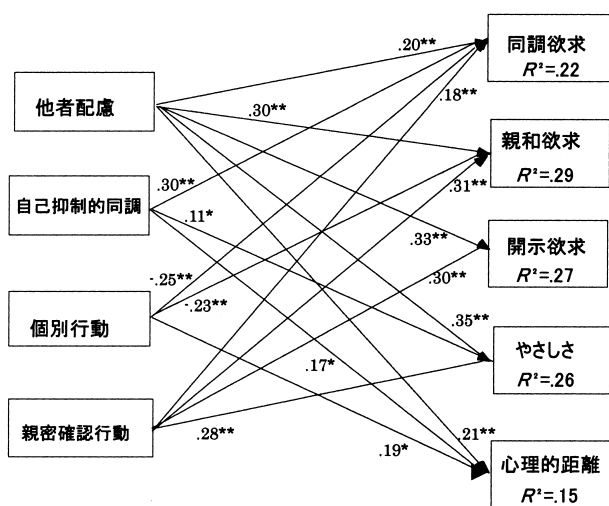
Figure 2. グループの友人との対面の友人関係が携帯メール送信時の感情状態へ与える影響および携帯メール送信時の感情状態がグループの友人への欲求へ与える影響を示すパス・ダイアグラム



R^2 : 説明率

値は標準偏回帰係数 ** $p < .01$ * $p < .05$

Figure3. グループの友人への欲求が対面の友人関係へ与える影響を示すパス・ダイアグラム



R^2 : 説明率

値は標準偏回帰係数 ** $p < .01$ * $p < .05$

Figure4. グループの友人との対面の友人関係がグループの友人への欲求へ与える影響を示すパス・ダイアグラム

響 ($\beta = .30$) を、「自己抑制的同調」に対して中程度の正の影響 ($\beta = .39$) を与えている一方 (Figure 1) で、「他者配慮」と「自己抑制的同調」も「気がかり」にそれぞれ弱い正の影響 ($\beta = .23$, $\beta = .31$) を与えていた (Figure 2)。また、「楽しさ」は「親密確認行動」に対して弱い正の影響 ($\beta = .23$) を与えている一方 (Figure 1) で、「親密確認行動」は「楽しさ」に弱い正の影響 ($\beta = .25$) を与えていた (Figure 2)。

次に、友人への欲求と対面のグループ内の友

人関係の相互の影響をみていく。グループの友人への欲求である「心理的距離」は、「他者配慮」「自己抑制的同調」「個別行動」にそれぞれ弱い正の影響 ($\beta = .16$, $\beta = .26$, $\beta = .30$) を与えていた (Figure 3)。また、対面の友人関係の「他者配慮」は、すべての欲求に正の影響をそれぞれ及ぼしていた。一方、対面の友人関係の「親密確認行動」は、「心理的距離」以外のすべての欲求 («同調欲求」「親和欲求」「開示欲求」「やさしさ») に弱い正の影響 ($\beta = .18$, $\beta = .31$, $\beta = .30$, $\beta = .28$) をそれぞれ与えていた (Figure 4)。

考 察

1. 思春期女子のグループの友人との携帯メール使用の実態について

携帯電話の所持率は84.2%であった。モバイル社会研究所の2005年の調査では、中学生の携帯電話の所持率は66.7%であり、本研究における所持率の方が20%近く高かった。これは、モバイル社会研究所の調査が全国の中学生男女を対象としているのに対し、本研究では首都圏都市部の中学生女子のみを対象としたことに起因すると考えられる。つまり、女子のほうが男子よりも早くから携帯電話を持つ傾向にあること、また、首都圏都市部という地域状況が関与し所持率に差が生じた (モバイル社会研究所, 2005) 可能性が考えられる。また、非所持者の92.2%が、今後携帯電話を所持することを望んでおり、その理由として利便性を考えての回答が多い一方で、「友達とメールをしたいから」「ほとんどの友達も持っているから」などの回答も多く、周りの友人の影響から携帯所持を希望する対象者が多く、中学生女子にとって友人とのメールのやりとりにより、常に友人とつながる感覚をもつこと、そして、友人と同じであることが重要視されていることがうかがえる。

また、日常的にグループに所属している者が対象者の98.1%にものぼり、最も大切にしているグループは、「クラス」が圧倒的に多かった。これは、学校のクラスは中学生が日常の多くの時を過ごす場所であるために、グループ成員との結びつきが必然的に強くなるためだと考えられる。最も大切にしているグループの人数 (自分を含めた人数) は、「2人」が5.4%、「3~5人」が55.1%、

「6～9人」が24.4%、「10人以上」が8.5%であり、佐藤・落合（1993）が女子高生のグループ成員数に関して考察したように、グループの構成人数の分布は、2人～10人までほぼ正規分布をなしていた。最も大切なグループの中で携帯メールのやりとりをする友人については、「3～5人」が最も多かったことから、所属するグループのほとんどのメンバーとやりとりをしていることがうかがえる。

また、最も大切なグループの友人との1日のメール送受信数は、それぞれ「0～20件」が9割を占めていた。本研究における1日の送信数・受信数は先行研究に比べ全体的に少ない傾向にあった。本研究では、中学生女子の同性のグループの友人との携帯メール送信数（受信数）と対象を限定したためと考えられる。最も大切なグループの友人とやりとりする主なメール内容（3つを選択回答）は、「なんとなくのおしゃべり」、「時間や待ち合わせなどの事務的な連絡」、「授業や部活動など学校のことに関する情報交換」を7割以上が選択していた。このことから、中学生女子はグループの友人と携帯メールをたわいもないおしゃべりのために使用したり、遊びの約束などの待ち合わせ連絡に使用したり、学校のことに関する情報交換のために使用していることが考えられる。また、それ以外にも「自分や友達の悩み事相談」も26%みられ、自分や相手の悩み事相談をするツールとして携帯メールを使用している。ここには、思春期女子が同性友人と内面的な話をすることでお互いの親密さを深めたい思いがうかがえる。

2. 携帯メール送信時の感情状態とグループの友人への欲求および対面の友人関係の関連

まず、グループの友人への欲求と携帯メール送信時の感情状態の相互の影響についてみていく。携帯メール送信時の「気がかり」は、「同調欲求」「心理的距離」と影響しあっていたことから、友人と一緒に行動したい・友人と距離をとりたい、という相反する2つの欲求と関連していることが示唆される。これは、思春期女子の友人と近づきたいが時には離れたいアンビバレントな感情が、携帯メール送信時という友人と離れた空間においても生じていることを表している。「気がかり」は、5つ全ての欲求に影響を及ぼしていたことを含めて考えると、グループの友人へメールを送る

際に生じる「気がかり」という感情は、友人への矛盾しあうさまざまな欲求に幅広く影響を及ぼしていることがわかる。

次に携帯メール送信時の感情状態と対面のグループ内の友人関係の相互の影響をみていく。「気がかり」は「他者配慮」「自己抑制的同調」と相互に影響しあっていた。このことから、相手が実際には見えないメールのやりとりでグループ友人との関係に気がかりを感じるほど、対面ではグループ友人に気を遣い、自分を抑えて周りに合わせており、また、対面場面で周りの友人に配慮し、周りに合わせているほど、メール送信時に相手の気持ちを気にし、自分がどのくらいグループの友人に受け入れられているかに敏感であることがうかがえる。つまり、対面における周りを重視したつき合い方が、メール場面においても相手の返信を気にするという点を中心に如実に表れている。一方、携帯メール送信時の「楽しさ」は、「親密確認行動」と影響しあっていた。グループ友人との1対1のメールが楽しいのは、友人との親密さをメールによりそのつど確認することができるためだと考えられる。つまり、閉鎖的な中で友人とやりとりするメールは、親密確認行為のひとつであり、実際の対面場面における親密確認行動の機会を強化するものと考えられる。友人と対面場面で一緒に行動することで親密さを肌で感じていると、メールでの相手とのつながりも楽しく感じている。つまり、中学生女子がメールで築く1対1の関係性と、対面でグループの友人と関わる中でとる行動は、緊密に連動していると考えられる。

「気がかり」と「楽しさ」は、それぞれ順に「3. 少しそう思う」「4. そう思う」に近い得点を示していたことから、思春期女子は携帯メール送信時に両方の感情を抱いていることが明らかとなった。これは、グループ内で行なわれているメールの内容や、その時々グループメンバー同士の関係性により、気がかりにも楽しくもなることを示している。つまり、グループ成員同士の関係性は、日々変動していると考えられ、その時々によりやりとりされるメール内容や、実際の対面場面での関わりにより、個人がメール送信時に感じる思いは変化すると考えられる。

次に、友人への欲求と対面のグループ内の友人関係の相互の影響をみていく。グループの友人への欲求の一つである「心理的距離」が「親密確認

行動」以外の全ての対面行動に弱いながらも正の影響を与えていた。このことから、中学生女子はグループ内で自分の全てを出し切ることは抵抗を感じ、友人とは一線をひく表面的なつき合い方をしている可能性がある。これは、グループ友人から嫌われたり、受け入れられないことを恐れる気持ちが働いているためかもしれない。

対面の友人関係の一つである「他者配慮」は、グループの友人へ抱く5つの欲求全てに対して正の影響を及ぼしていた。つまり、周りの友人へ配慮するほど、「近づきたいが離れたい」といった矛盾する5つの欲求が強まることを示しており、「他者配慮」は複雑な影響を諸欲求に対し同時に与えていると考えられる。また、「親密確認行動」も「心理的距離」以外の全ての欲求に正の影響を与えており、グループを形成し、その友人との類似性に重点をおいた関係を築くなかで、さまざまな複雑な思いが同時に生じていることがうかがえる。

今後の課題

中学生の携帯メール使用は、学校や地域状況、保護者の影響力が関与することが予想されるため、他の地域や学校を対象とすると、今回の結果とはまた異なる知見が得られる可能性がある。さらに、グループの友人と1日に「80件以上」もメールのやりとりをしている対象者が数名いたことから、このようなヘビーユーザーにインタビューなどを実施し、友人とのメールに依存する中学生女子の友人への欲求や対面の友人関係との関連を質的に捉える必要もあるだろう。

引用・参考文献

- 足立由美・高田茂樹・雄山真弓・松本和雄 (2003). 携帯電話コミュニケーションから見た大学生の対人関係 教育学科研究年報, 29, 7-14.
- 天野隆雄 (1975). 女子生徒のインフォーマル・グループ アジア文化10, 87-95.
- 電気通信事業者協会 (2007). 「携帯電話・PHS 契約数」
<http://www.tca.or.jp/japan/database/daisu/index.html>
- 榎本淳子 (2000). 青年期の友人関係における欲

- 求と感情・活動との関係 教育心理学研究, 48, 444-453.
- 榎本淳子 (2003). 青年期の友人関係の発達的变化 風間書房
- 福富護 (1997). 思春期が人生の中でもつ意味—自分探しの原点 児童心理: 2月号臨時増刊, 3-12. 金子書房
- 林泰子・宮田仁・林徳治 (2004). 高校生を対象とした携帯メールと友人関係に関する調査研究 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 17, 191-201.
- 保坂一己 (1993). 中学・高校のスクール・カウンセラーの在り方について —私立女子高校での経験を振り返って— 東京大学教育学部心理教育相談紀要, 15, 87-95.
- 上別府圭子・杉浦仁美 (2002). 携帯eメールが思春期の対人関係に及ぼす影響—首都圏5公立中学校における実態把握— 安田生命社会事業団 研究助成論文集, 38, 48-57.
- 三好智子 (1998). 女子グループに関する一研究—対グループ態度の評価尺度作成の試み— 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, 2, 85-94.
- 三好智子 (1999). 女子友人グループについての理論的考察 京都大学大学院教育学研究科紀要, 45, 353-361.
- モバイル社会研究所 (2005). モバイル社会白書 2005 II 個人 3章子ども 66-97. NTT 出版
- モバイル社会研究所 (2006). モバイル社会白書 2006 II 個人 3章子ども 84-101. NTT 出版
- 内閣府政策統括官 (2007). 情報化社会と青少年—第5回情報化社会と青少年に関する意識調査について— 1-9.
- 中村泰子 (1998). 女の子のトラブル解説法—思春期のふつうの女の子の生活と心— 月刊生徒指導特集「女の子がわからない!」5月号
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理研究, 44, 55-65.
- 緒方泰子・和泉由貴子・北池正 (2006). 高校生の孤独感と携帯メールの利用および友人とのネットワークとの関連 日本公衆衛生誌 53巻7号 480-491.

荻野美佐子 (1997). 感じやすい心の揺らぎを知る－思春期の心理特性 児童心理：2月号臨時増刊, 21-28. 金子書房

岡田努 (1993). 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, 5, 43-55.

佐藤有耕・落合良行 (1993). 女子高生のグループの成員数と友人とのつきあい方の関係 筑

後大学心理学研究, 15, 185-193.

菅佐和子 (1988). 思春期女性の心理療法－揺れ動く心の危機－ 創元社

泊真児 (2004). 携帯メール使用が大学生活への適応に及ぼす影響 大妻女子大学人間関係学部紀要 人間関係学研究, 5, 25-39.

(すみた まりこ 東大和市スクールカウンセラー)

(しまたに まきこ 生活機構研究科)